

資源化促進で 低炭素社会づくり



和歌山県有田川町

人口	2万7170人
世帯数	1万499世帯
(2016年10月31日現在)	
ごみ量総計	7269 t
資源系ごみ量合計	1199 t

和歌山県の中央部に位置し、山に囲まれた緑豊かな有田川町。有田川によって扇形の段に形成された美しい棚田「あざぎ島」のほか、有田みかんの産地としても知られており、秋から冬にかけて色づいたみかんの木々が町内のいたるところで見受けられる。市街地では、町役場の周辺を中心に宅地開発が進み、新興住宅も増加傾向にある。

有田川町は、資源ごみ処理のマイナズ入札で得た収益を活用して「低炭素社会づくり推進基金」を設立。太陽光発電設備などの導入や生ごみ処理機の購入に対する助成に活用している。住民による資源ごみの分別精度が高いことで実現した取組みだ。現在では再生可能エネルギーの売却益を活用した「循環型社会の構築と自然エネルギー推進基金」へと発展

させ、ごみの減量とともに低炭素な地域社会づくりに取り組んでいる。

マイナズ入札の 収益を基金に

有田川町は2006年、吉備町、金屋町、清水町が合併して発足。資源ごみの収集・運搬・処理業務について、委託費用の見直しを実施した。

従来随意契約により行っていたため、2006年度には3町合わせて年間約3200万円かかっていたが、2008年に入札を行った結果、資源ごみの分別精度が良いこともあって委託費がマイナズに移行。現在では全町分の資源ごみマイナズ入札によって年間約260万円の収益を得ている。

町ではこの収益を活用するべく、

2008年に「低炭素社会づくり推進基金」を設立。現在では太陽熱温水器、太陽光発電設備、生ごみ処理機などについて助成を行うほか、コンポストの無償貸与にも活用している。2015年度も含めた累計の補助件数は太陽熱温水器が134件、太陽光発電設備が365件、生ごみ処理機などが185件。また、コンポストの無償貸与は961件(1555個)に及んでいる。

また、町では再生可能エネルギー事業として、プラスチック収集場への太陽光発電設備の設置のほか、町営二小水力発電所を昨年2月に竣工。今年2月には旧峯口小学校への

太陽光発電所も完成させる。基金はこうした事業にも活用しており、将来的には再生可能エネルギー事業での売電収益で各種助成制度や小中学校への環境教育の支援などを実施したい考えだ。再生可能エネルギー関連ではほかにNPO法人による風力・太陽光のハイブリッド型街灯整備活動などを実施。農業における官民協働によるエネルギーの地産地消の取り組みにも着手していきたいとしている。

ステーション建屋を整備



①取り残されたごみの一部を自治会がステーションに掲示。分別を呼びかける
②倉庫のような形状のステーションも。資源物の水濡れも防止している
③環境センターの外観

同町はごみ全品目の指定袋制を導入済み。合併前の吉備町地区を中心に、自治会がごみステーション専用の建屋を設置し、古紙・古布など資源物が濡れないように管理している。また収集の際、分別が不十分なごみはステーションに取り残しを実施。自治会で住民に注意を呼びかけるなど、分別意識向上に取り組んでいる。分別精度の高さには、住民自身によるこうした取組みがベースにある。

一方で、町ではステーションでの電池類拠点回収や在宅医療廃棄物の戸別回収など、排出しにくい品目への対応も実施。在宅医療廃棄物は点滴パック、ストマー袋など、CAPDパックについて、不燃ごみ専用袋に入れておき、まとまったら町が戸別で回収している。

古着リユース、 小型家電も

町ではこのほか、3R推進の取り組みとして、年に1度のイベント「どんどんまつり」で2012年度から子ども古着バザーを実施。連携している町内の公立保育所を地区の拠点として、各家庭から古着を持ち込んでもらい、バザーで販売する。

収益は図書購入代として保育所に還元。イベント時にはこのほか、「生ゴミグレイエットキャンペーン」を展開、来場者に水切りグッズを配布し、家庭での減量を呼びかけている。

また、2015年2月からは小型家電リサイクルをスタート。環境省の実証事業などを活用しない独自の取組みで、公共施設5カ所にボックスを設置して拠点で回収するほか、清掃センターでのピックアップも一部行っている。全体としては中品位品、次いでパソコンの排出が多いという。現在、各拠点からの回収、選別、リサイクル施設への搬入を町が手がけて売却益を得ているが、今後は効率化のため、体制の見直しを行う予定だ。

担当者は「住民の皆さんが分別意識啓発に取り組んでいただいているおかげで、集められた資源ごみも有効に活用できている。基金による再生可能エネルギー導入促進なども、分別精度の高さがあったからこそできたことだ。今後も住民の皆さんの協力を得て、低炭素な地域社会づくりに取り組み、魅力のある町としての存在感を高めていきたい」と語っている。W

(本誌・八木)